

〔論文〕

日本語教師がSNSの使用を中止した要因とその背景

——旧Twitterの使用を中止した寺山さんのケーススタディー——

末 松 大 貴

名古屋学院大学国際文化学部

要 旨

近年のSNSの普及に伴い、教育現場でのSNSの利用に注目した研究も行われるようになった。その中で、SNSの使用の中止に注目した研究も行われているが、日本語教師のSNSの使用の中止に関する研究は見られない。本研究では、ケーススタディーを研究の枠組みとして、Twitterの使用を中止した1名の日本語教師を対象に、「Twitterの使用を中止した要因は何か」「その要因には過去の経験はどのように関連しているか」という2点について、質的な研究アプローチによって調査と分析を試みた。その結果、対象者がTwitterの使用を中止した要因は、(1)喧嘩のように見えるやりとり、(2)日本語教育業界に対するネガティブな意見、(3)日本語教育を変えていこうとする高い志を見た事であった。さらに、これら3点には、日本語教師を目指すということがどのような意味があったのか、権力についてどのように考えているのかという2つのライフテーマが関わっていたことが明らかとなった。

キーワード：日本語教師，SNS，ライフテーマ，ケーススタディー

Factors behind Japanese language teachers discontinuing SNS use: A case study of Terayama's decision to quit Twitter

Daiki SUEMATSU

Faculty of Intercultural Studies
Nagoya Gakuin University

1. 本研究の背景と目的

本研究は、1名の日本語教師がソーシャルネットワーキングサービス（以下、SNS）の1つである旧Twitter（以下、Twitter¹⁾）の日本語教育用アカウントの使用を中止した要因を明らかにすることを目的としたケーススタディー（事例研究）である。その過程で、対象者がSNSの使用を中止した要因には、SNSを使用していた期間だけでなく、それ以前の経験やそこで生まれた価値観が影響していることが仮説として立てられた。本研究では、対象者の日本語教師がSNSの使用を中止した要因と、その要因について対象者の過去の経験がどのように関わっていたのかを具体的な事例として示す。

SNSとは、「日常的なコミュニケーションの支援を目的として、コミュニケーション主体である個人の存在を明示化し、個人間の情報流通を実現するためのシステム」（大向、2006、p.994）である。日本語教育においてSNSは教室内外の活動に応用されてきた（高橋、2014；2015）。近年では、日本語教師とSNSとの関わりも注目されている。例えば、南浦・瀬尾・田嶋(2012/2022)は、言語教師が「教えることを通して単に学習者の学びの機会を可能な限り増やすだけでなく、教師・学習者双方が変わっていくこと」（p.103）を志向する変革的知識人であるためには、教師同士のつながりや議論が可能な場が重要であり、その1つとしてSNSを挙げている²⁾。そのようなSNS上のつながりや議論に参加した結果、SNSは日本語教師としての自己研鑽ツールとなったと感じている教師の経験も報告されている（青木、2023）。日本の学校教育でもSNS上での異業種の人材との関わりが見られるが（藤川、2012）、日本語教育においても、国・地域、そして様々な立場を越えたつながりが可能であると考えられる。

しかし、日本語教育では、SNSを教育実践に応用した報告やSNSを利用して学習する学習者に注目した研究は見られるものの、SNSを利用する日本語教育関係者に注目した研究は少なく、特に個人の経験や認識に焦点を当てた研究は行われていない（詳細は2.2.で述べる）。筆者はある時、数年関わり続けていた日本語教師の寺山さん（仮名）と話をしていた際、寺山さんは日本語教育用のTwitterのアカウント³⁾を作成したが、そのアカウントはほとんど使用しなくなったということを知った。その当時、筆者も日本語教育用のTwitterアカウントを使用しており、様々な情報や意見を得ることができるという実感があった。また、他のSNSでも日本語教育関係のコミュニティに参加しており学びが多いと感じていた。このことから、寺山さんがなぜTwitterの使用をやめたのか、疑問に思った。SNSは、教育機関などで使用されるLMS（Learning Management System:学習管理システム）とは異なり、使用するのか、使用する場合どのように使用するのか、いつ使用をやめるのかなどは、個人が自由に決めることができる。そのため、「使いたくなければ使わなくて良いのではないか」という意見もあるだろう。しかし、寺山さんは初めから全く興味がなかったわけではなく、日本語教育用のアカウントを趣味用のものとは別で作成して使用していた。そのアカウントでは主に自身の研究内容の発信を行っており、少なくとも1年以上は使用していた。本節の前段落で述べたように、日本語教育関係者のSNS上での連携が提唱され始めている現在の状況を考えると、「使いたくなければ使わなくて良いのではないか」と安易に結

論付けるのではなく、寺山さんが Twitter の使用を中止した背景を丁寧に探ることで、日本語教師の SNS の使用に関する研究に示唆を示すことができると考えられる。

以上のような背景から、本研究では、寺山さんが日本語教育用の Twitter のアカウントの使用を中止した要因とその背景を明らかにすることを研究の目的とする。なお、本章で述べたように、本研究の背景には、筆者個人の関心、そして、対象者である寺山さんの個人的な経験や認識が大きく関わっている。このことから、本研究は「研究者が関心を持つ、特定の人物（学習者や教師）や学習場面、プログラム、出来事などの境界のある特定の事象（＝ケース）に焦点を当てる」（脇坂，2021，p.160）ケーススタディーを研究の枠組みとする。

2. 先行研究

2.1. ソーシャルメディアの使用の中止

ソーシャルメディアについて、総務省（2018）は「ブログ、ソーシャルネットワーキングサービス（SNS）、動画共有サイトなど、利用者が情報を発信し、形成していくメディア」（p.159）と定義している。つまり、ソーシャルメディアの1つとしてSNSがあり、その中にTwitterも含まれている。また、総務省（2024）によると、日本国内におけるTwitterの利用率は、2014年には21.9%であったがその後年々増加し、2023年度には49.0%に達した。このうち、使用の方法について閲覧だけでなく「書き込む・投稿する」と回答した割合は13.6%であり、LINE、Instagramに次いで3番目に高い数値であった。また、同調査の年齢別の利用率を見ると、20代が81.6%で最も高く、10代（65.7%）、30代（61.0%）と続く。このように利用率が年々高まっているTwitterは、匿名で複数のアカウントを作成することも可能である。そのため、日本の学校教育における教師の中には、Twitterで勉強や情報発信を行う例（南浦，2021）、過重労働や「#教師のバトン」プロジェクト⁴⁾についてツイートすることで現状を訴える例（四方田，2022；Mason，2019）も見られる。このことから、日本語教師の寺山さんが日本語教育用のTwitterアカウントを利用しようとしたことも、特に珍しい事例ではないと言える。

ソーシャルメディア、そしてTwitterを含むSNSに関する研究は数多く行われてきた。その中には、本研究のように、使用の中止に焦点を当てた研究も見られる。Ahmedほか（2022）は、Facebookを利用している384名を対象に調査を行っている。具体的には、Linほか（2020）の刺激-生体-反応理論（S-O-R theory）とフロー理論（flow theory）を研究の枠組みとして、先行研究を基にFacebookの使用の中止の要因として考えられる19の仮説を検証した。その結果、Facebookにおける「情報過多」「コミュニケーション過多」「自己効力感」「プライバシーへの懸念」「迷惑感」がユーザーの「疲労」につながり、使用を中止する要因となることを示した。また、Park（2015）はFacebookを利用している韓国人ユーザー256名を対象に、先行研究を基に7つの仮説を検証した。その結果、社会的過負荷、SNSの使用の複雑性、SNSの使用結果の不確実性、メディアの否定的影響がユーザーのSNS使用における認知的不協和となり、SNSを使用することへの葛藤や使用の回避につながることを示した。教育関係では、SNSの使用の中止に関する研究

は少ないが、調査項目や結果の中で、使用の継続や中止に関わる要因について触れられているものがある。Cetinkaya (2019) は、トルコ国内の15の中等教育機関の管理者（学校長など）15名を対象に、他の教員との連携や学校管理の上でSNS (Facebook と WhatsApp) を用いることのメリットやデメリットなどを調査している。その結果、SNSの利用はコミュニケーションの増加や資料の共有などに効果的であるという回答が目立った一方、プライバシーやセキュリティの面で利用を中止したケースも6件確認されたことを報告している。また、Van Den Beemt ほか (2019) は、教室でのソーシャルメディアの利用に関する文献271件のレビューを行っている。そして、学校単位での管理者の対応（一人ひとりの教師の期待に応えること、不安を取り除くこと）や、教師個人のソーシャルメディアに対する知識・経験・学ぼうとする態度が使用や使用の中止に影響していることを示した。

このように、ソーシャルメディアの使用の中止に関する研究は複数見られるが、いずれもある程度大規模な調査によって大まかな傾向を探るものが多い。また、教育分野の研究では、ソーシャルメディアを教育機関内の授業や他の教師との連絡で使用する場合について調査が行われているが、本調査で対象とする寺山さんの場合、Twitterを教育機関内の連絡や授業で使用することを考えていたわけではなく、日本語教育用のアカウントを作って情報発信などを行おうとしていた。そのような日本語教師個人による使用の中止について焦点を当てた研究は行われていない。

2.2. SNSを利用する日本語学習支援者

SNSと日本語教育に関する研究は、教室内外でSNSを利用した教育実践の報告、SNS上で自律的に日本語を学ぶ学習者の調査、SNS上で見られる日本語表現の調査などがある。一方、SNS上で日本語学習の支援を行う人々を対象とした研究は少なく、本稿執筆時点（2024年11月）で筆者が調査した限りでは末松（2020, 2021）のみである。

まず、末松（2020）は、SNSの1つであるFacebook上のコミュニティで日本語学習者への支援を行う学習支援者57名を対象に、SNS上での学習コミュニティおよび学習支援者という自身の立場をどのように認識しているのかを調査した。具体的には、秋田（1996）、鈴木（2015）を基に比喩生成課題を作成し、「○○は～のようだ。なぜなら…」という形式の質問項目に回答を依頼してその記述を質的に分析した。その結果、SNS上のコミュニティでも「分業的な教師環境や個体主義的な成長観」（牛窪, 2015a）が生まれる可能性があることを指摘している。そして、それを防ぐためには、SNS上での学習支援を従来の対面での学習支援と比較し、それによって生まれる問いを、学習支援者同士で共有する必要があると述べている。また、末松（2021）は、末松（2020）と同様のコミュニティを対象に、日本語学習支援者がSNS上のコミュニティでの「協働」をどのように捉えているのかについてGoogle Formsを用いてアンケート調査（自由記述と5段階評価の組み合わせ）を実施した。その結果、26名の回答から、SNS上での活動だけでなく、SNS以外のそれぞれのフィールドで抱える悩みや迷いについて共有することも学習支援者は「協働」として捉えていることを明らかにした。

以上のように、末松（2020, 2021）はソーシャルメディア（特にSNS）を利用する日本語学習

支援者に焦点を当てた研究ではあるが、SNSの使用の中止を研究の焦点としているわけではない。そのため、日本語教師のSNSの使用の中止という観点は、日本語教育において十分に議論されてきたとは言い難い。また、末松の研究はいずれも20名上の対象者を基にしたものであるが、1章で述べたように、SNSの使用や中止に関する決定は個々人の経験や価値観による影響が大きい。日本語教師に関する研究では、近年は教師の経験に焦点を当てた質的研究が注目されている（牛窪, 2015b）が、日本語教師のSNSの使用の中止に関する研究においても、対象者（日本語教師）の個人的な経験や認識に焦点を当て質的に研究を進めていく必要がある。

2.3. SNSの使用の中止とライフテーマ

末松（2020, 2021）の研究ではもう1点留意すべき点がある。それは、いずれもSNS以外の「対面の学習支援」という内容が含まれていたということである。まず、末松（2020）は、SNS上での学習支援と従来の対面での学習支援の比較によって生まれる問いが重要であると指摘している。また、末松（2021）によると、SNS上の日本語学習支援者はSNS以外のフィールドで抱える悩みや迷いについて共有することも協働であると考えていたという。これらの結果からは、日本語学習支援者のSNSの使用には、個々の学習支援者がSNS以外の場での経験から得た信念や考えが関わっていることが示唆される。このような日本語教師のSNSの使用に影響を与える信念や考えは、サビカスが提唱したキャリア構築理論（Career Construction Theory）の1つであるライフテーマであると考えられる。渡辺（2018）によると、ライフテーマとは、個人のキャリアストーリー（個人が直面した発達課題や職業上のトランジション【転機】などが語られたもの）にまとまりを与えるテーマであり、個人にとっての「重要なこと」（*matter*ing）に関係しているとされている。また、サビカス（2023）はライフテーマについて、個人のキャリアストーリーに関連するニーズや感情、動機などが表現されたものであると述べている。このような個人のライフテーマがSNSの使用にも影響しているということは、それほど想像に難くない。しかし、日本語教師のSNSの使用について個人のライフテーマが具体的にどのように影響しているのかを調べた研究は、筆者が調べた限り行われていない。

2.4. 先行研究のまとめと本研究の研究課題

先行研究では、ソーシャルメディアの使用の中止の要因について量的な調査によって明らかにすることを試みたものが主流であった。この傾向は、教師がソーシャルメディアの使用を中止した場合の研究も同様である。加えて、学習支援や学校単位でソーシャルメディアを運用する教師を調査の対象としている。しかし、2.1.で示した南浦（2021）や四方田（2022）、Mason（2019）のように、教師が個人で学習や社会参加の手段としてソーシャルメディアを使用している場合もある。これは日本語教師も同様であり、例えばTwitterでは、「#日本語教師」「#登録日本語教員」などハッシュタグを用いた投稿や、それに続く意見交換が行われている（2024年11月27日22時12分、筆者による確認）。このような機関の方針や授業での応用ではない個人での使用は、1章で述べたSNS上での教師の連携につながる可能性がある。したがって、個人でSNS使用をし

ていた日本語教師がなぜ使用を中止したのかを明らかにすることは、SNS上での日本語教師の連携やその研究に示唆を示すことにつながると考えられる。また、このような背景、内容であることから、量的な研究ではなく質的な研究アプローチが適していると考えられる。

このような背景から、本研究では、日本語教育用にTwitterの使用を始めたが、後に使用を中止した日本語教師の寺山さんを調査の対象として、その要因を探ることを目指した。まず、「RQ1：寺山さんが日本語教育用のTwitterの使用をやめた要因は何か」を設定し、調査を実施した。分析の結果、寺山さんがTwitterの使用を中止した要因には寺山さんの過去の経験やそこで生まれた考えが影響していることが示唆された(詳細は3.3.で述べる)。これは、2.2.で示した末松(2020; 2021)のまとめからも支持されるものであり、さらに、先行研究でも明らかにされていないものである。そこで、「RQ2：RQ1について、寺山さんのそれまでの経験(日本語教育関係、日本語教育関係以外)はどのように関連しているのか」を設定して追加の分析を行った。その後、RQ1とRQ2の結果を踏まえて本研究全体の考察を行った。以下、図1に本研究の流れをまとめて示す。

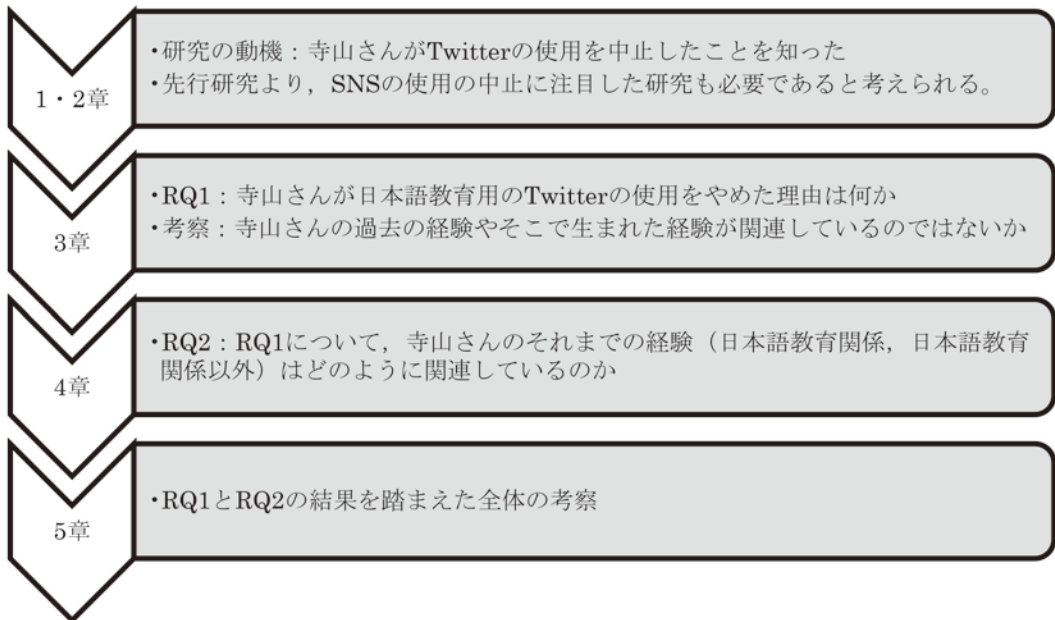


図1. 本研究のRQ1とRQ2の関連（右）と本稿の該当の章（左）

以上のように、本研究は初めからRQ1とRQ2を設定したわけではなく、RQ1の結果と分析を基にRQ2を設定し分析を行うことで、ケーススタディーの特徴である「『なぜ』『どのように』という問いの答えを、文脈・状況と時間的経過を考慮しながら探究する」(脇坂, 2021, p.160)ことを目指した。次章では、まずRQ1についての結果を示す。

3. RQ1について

3.1. 調査概要

調査対象者である寺山さん⁵⁾は、調査開始時点（2023年2月）で、日本国内の大学で留学生別科の専任教員として勤務している日本語教師歴9年の30代の日本人女性である。筆者と寺山さんは、調査開始時点までに日本語の授業や日本語教育の研究、趣味などに関する話題で関わりを数年間持ち続けていた。寺山さんが日本語教育用のTwitterのアカウントを作成したが使用しなくなったことは、筆者から問いかけて聞き出したわけではなく、雑談をしている中で寺山さんがふと話し始めたことがきっかけであった。このように、筆者は寺山さんと調査開始時点まで数年間関わっており、本調査への協力依頼に対しても快諾を得たため、調査を行う上でのラポールも形成されていると判断した。

第2章で述べたように、本研究は、寺山さん1名の事例を詳しく明らかにすることを目的としている。このため、調査方法としてビデオ会議システムZoomを用いて半構造化インタビューを行った。寺山さんは自身の研究でインタビューを実施した経験があり、他の研究者の研究でインタビューを受けた経験もあったため、インタビュー自体にも慣れていると考えた。以下、RQ1に関するインタビューガイドを示す。

表1. RQ1についてのインタビューガイド

- | |
|---|
| <p>2023年2月3日 約40分（Zoomで実施）</p> <ul style="list-style-type: none"> • Twitterを日本語教育用に使おうと思ったきっかけ • Twitterで見たツイートの中で印象に残っているもの • Twitterをどのように使おうと思っていたか • Twitterを見なくなったきっかけ |
|---|

分析は、まず、インタビュー中でTwitterの使用の中止について述べていた部分を中心に、「収集された文字テキストデータについて『コード』、つまり、それぞれの部分が含む内容を示す一種の小見出しのようなものをつけていく作業」（佐藤，2008，p.34）である定性的コーディングを行った。その結果、寺山さんはTwitterの使用を中止した要因として3種類のTwitter上で見られる他者のツイートを挙げていたことが明らかとなった。この3種類について説明を記述するため、生成したコードと寺山さんの実際の発言を用いて、「記述的（descriptive）な理論記述」（大谷，2008，p.344）を作成した。大谷（2008）は、理論には「記述的」なもの（実はこういうことが起きている、この現象の背景にはこういう意味がある）、「予測的」なもの（これはこうなるだろう）、「処方的」なもの（こうなるためにはこうするとよい）があると述べている。RQ1は、寺山さんがTwitterの使用を中止した要因は何か、つまり、なぜ寺山さんはTwitterの使用を中止したのかを明らかにすることが目的であるため、上述した記述的（descriptive）な理論記述によって説明するのが最も適していると考えた。

3.2. 結果

寺山さんはTwitterの使用を中止した理由として、Twitter上で見たツイートの事を挙げていた。それは、(1) 喧嘩のように見えるやりとり、(2) 日本語教育業界に対するネガティブな意見、(3) 日本語教育を変えていこうとする高い志、以上3点に関するものである。以下、これら3点について、作成したコードと寺山さんの発言（斜字）を用いて作成した「記述的（descriptive）な理論記述」（大谷，2008, p.344）を示す。

3.2.1. 喧嘩のように見えるやりとり

1つ目の理由として、「すごい印象に残ってるのは、なんか喧嘩してるやつ、喧嘩してるの」（①T26⁶⁾）や「(Twitterは) 良い部分もあると思うんですけど、喧嘩をやっぱ見たのは大きいかもしれないですね」（①T144）のように、複数の日本語教育関係者の衝突を見た事を挙げていた。具体的には、ある時、Twitter上で教育経験が浅い日本語教育関係者が教師と学習者の関わり方に対する考えを示した際、ツイート主との関係性が薄い日本語教育経験者が日本語教師としてのあり方を根本から疑問視する声を示した。その後、元の議論の当事者ではない他者である複数の日本語教育経験者が意見の応酬を始めた。寺山さんには、その様子が単なる意見の違いではなく「なんか喧嘩してるやつ（＝ツイート）」（①T26）のように見えた。その後、教育経験が浅い日本語教育関係者はTwitterのアカウントを削除した。このことに対して、元の議論の当事者ではない他者が責任の追及を行っていた。寺山さんは議論のきっかけのツイートを書いた教育経験が浅い日本語教育関係者について、日本語教師としてのあり方を根本から疑問視する声を受けたり、自身が考えを示したせいで複数の日本語教育経験者が喧嘩のように見えるやりとりが起きてしまったことから、彼/彼女にとってTwitterは逃げた方が良い世界となったと考えていた。寺山さんは、議論のテーマであった教師と学習者の関わり方に対する考えについて、自身で海外での日本語教師としての勤務をきっかけとした考え方の大きな変化を経験していた。この経験から、寺山さんは、それぞれの日本語教師は日本語教師になるまでの固有の経緯で生まれた固有の信念を持っていると考えていた。このことを踏まえ、寺山さんは、Twitter上で見られる喧嘩のようなやりとりは、相手の信念の背景にある経験への思慮の不足によるものであると考えていた。

3.2.2. 日本語教育業界に対するネガティブな意見

2つ目の理由として、「結構ネガティブなこと書いてる人も多いので」（①T64）や「なんかまじはさっきのみたいな、ネガティブなのをあんまり見たくないっていうのと」（①T98）のように、日本語教育界に対するネガティブな内容のツイートを見た事を挙げていた。寺山さんはTwitter上で、待遇の悪さなど日本語教育界に対する不満や、日本語教師を続けることに対するネガティブな考えを複数回見た経験があった。その中には、自身は完全な被害者であり何も悪くないという立場で書いたものもあると感じていた。

寺山さんは、高校時代に日本語教師を目指すようになったが、勉強に対する苦手意識があり成績も悪かった。また、大学時代には将来は大学で教えたいという目標を持ったが、当時は周囲からの否定的な声があった。それらに対して、周囲のサポートや環境の良さはあったという自覚はありつつも、過去を頑張って乗り越えて夢を叶えたという自負があった。このことから、Twitter

上で見られた日本語教師を続けることに対するネガティブな考えや日本語教育界に対する不満について、個人で改善に向けて努力できることはあったのではないかという疑問を抱いていた。

3.2.3. 日本語教育業界に対するネガティブな意見

3つ目の理由として、「すごい志が高い人がいる。あの、日本語教育全体を考えようみたいな」(①T104)や「本当になんか、『このままでは日本語教育業界が』というその主語が大きい形のツイートとか、なんとかしていかなきゃいけない系の」(①T106)のように、日本語教育に対する高い志を示したツイートを見た事を挙げていた。寺山さんはTwitter上で、日本語教育業界全体に対する問題提起や改善の提案という日本語教育に対する高い志を目にすることがあった。また、研究会や出版に関する多数の情報や研究会の参加者の学びの報告も目にした。それらを見て「すごいなと思って。あ、でも本当にすごいなって思うんですよ」(①T110)という思いは抱きつつも、今は自分のことで精いっぱい議論や研究会に参加することの困難さを感じ、同じような高い志は持てないと感じていた。その結果、「自分はその業界の一人になれていない気がする」(①T106)という日本語教育業界への帰属意識の希薄化が起き、Twitterを見たくないと思うようになった。

3.3. RQ1とRQ2のつながり

RQ1の調査では、寺山さんはTwitterの使用を中止した理由として、(1)喧嘩のように見えるやりとり、(2)日本語教育業界に対するネガティブな意見、(3)日本語教育を変えていこうとする高い志、以上3点を見たことを挙げた。(1)や(2)は、客観的に見てややネガティブなイメージでもありそれを見るのが嫌だから、ということは想像に難くない。一方、(3)は、内容だけで見れば(1)(2)とは異なりポジティブなものである。寺山さんはなぜこのような一括りにはできない3点を理由として挙げたのだろうか。言い換えれば、これら3点は寺山さんにとってどのような意味を持つ内容であったのだろうかを考察する必要がある。

3点のうち、(1)喧嘩のように見えるやりとりと(2)日本語教育業界に対するネガティブな意見について、寺山さんはまとめて「自分にとってネガティブな内容」として、以下のように述べていた。

まずはさっきのみたいな、ネガティブなのをあんまり見たくないっていうのと、なんか、いやわかんないです、その人の状況がわかんないの、ツイートしてる人の状況がわからないので、何とかできるかどうかかわかんないですし、本当に辞めるしかないのか、その別の学校に変われないのかとかもわかんないですけど、やっぱりなんか自分の職業とかのことが悪く書かれてると嫌だなと思って。(①T98)

注目すべきなのは、寺山さんが「ネガティブなツイートを見るのは嫌だ」と感じつつも、その内容を書いている人の状況が分からないと述べていることである(太字部分)。寺山さんは同様の内容を、1回目のインタビューで上記も含めて計4回述べていた(①T98, ①T112, ①T126,

①T172)。これは、それぞれの日本語教師は日本語教師になるまでの固有の経緯で生まれた固有の信念を持っている、という寺山さんの考えとも一致するものである（3.2.1.参照）。つまり、寺山さんは、それぞれのツイートにはそれぞれの人が抱えている事情が反映されているのではないかと、つまり、Twitter以外の場での経験やそこで生まれた考えが反映しているのではないかと考えていたことが分かる。

また、RQ1で示した寺山さん自身の結果からも、(1) 喧嘩のように見えるやりとりには過去に海外で教えていたこと（海外での日本語教師としての勤務をきっかけとした考え方の大きな変化を経験していた）が、(2) 日本語教育業界に対するネガティブな意見には日本語教師を目指し始めたときのことが関わっていた。このように、寺山さんがTwitterの使用を中止した要因には、寺山さんが過去の経験から生成した価値観や信念が関わっていることが示唆される。このことは、末松（2020；2021）のように、SNSの使用やその活用にはそれ以前の経験によって得られた個人の信念や考えが影響している可能性とも合致する（2.2.参照）。以上のことから、寺山さんがTwitterの使用を中止した要因についてさらに探ることを目指し、「RQ2：RQ1について、寺山さんのそれまでの経験（日本語教育関係、日本語教育関係以外）はどのように関連しているのか」を設定し、寺山さんに再度調査を依頼することにした。

4. RQ2について

4.1. 調査概要

対象者は、RQ1と同様、寺山さんである。RQ1の分析終了後、寺山さんに再調査の主旨を説明し、協力の承諾を得た。通算2回目（RQ2では1回目）のインタビューでは、RQ1のインタビューの分析の中でRQ2に関わっていると思われる内容について質問した。その後、過去のインタビューの回答で筆者が気になった点を尋ねるため、通算3回目（RQでは2回目）のインタビューを行った。なお、RQ2についてのインタビューは過去のインタビューの逐語録をZoomで画面共有しながら行った。表2にRQ2についてのインタビューガイドを示す。

表2. RQ2についてのインタビューガイド

2回目 2023年8月21日 約75分（Zoomで実施） ・日本語教師を目指そうと思ったきっかけ ・過去に「日本語教師になるのは難しいよ」と言われた時の経験 ・今まで私はがんばったと思っている理由 ・日本語教育についての自身の価値観が変わったなと思う経験 ・他者のツイートを見て自分は業界の人になれていないと感じた理由
3回目 2023年9月2日 約52分（Zoomで実施） ・日本語教師という仕事が「しっくりくるな」と感じた理由 ・「日本語教師になるのは難しいよ」という言葉が今では理解できると思う理由 ・留学生の留学を「特別な機会にしてあげることができていない」と思う理由 ・「権力を持ったらいろいろなことを忘れてしまう」と思う理由 ・「権力に対して反発心を持っている」理由、そのきっかけ

分析は、インタビューデータを基に「一つひとつのデータの断片に小見出しあるいは索引のようなラベルを割り振っていく作業それ自体を通して、最終的にできあがる調査報告書の内容やストーリーラインを徐々につくりあげていく」（佐藤，2008，p.99）ことをめざした。まず、「小見出しあるいは索引のようなラベルを割り振っていく作業」として，RQ1と同様，定性的コーディングを行った。次に，コードを用いて「できごとを，その関係性も含めて記述したもの」（大谷，2019，p.308）であるストーリーラインを作成した⁷⁾。表2で示したように，インタビューの内容は複数の時期や内容に関するものであるため，ストーリーラインも，時期や内容のまとまりによって分けて作成した。最後に，各ストーリーラインがRQ1の3つの内容とどのように関連するかを検討した。

4.2. 結果

分析の結果，意味のまとまりや語られた内容がいつのものかによって，ストーリーラインは4つのまとまり（SL1～SL4）に分けられた。このうち，RQ1の（1）喧嘩のように見えるやりとりと（2）日本語教育業界に対するネガティブな意見に関連するものとして，SL1：将来の夢が見つからないというコンプレックスからの解放と，SL2：周囲からの否定的な意見や学習での苦勞を乗り越えたという自負が得られた。一方，RQ1の（3）日本語教育を変えていこうとする高い志に関連するものとして，SL3：権力に対する反抗心と自身が持つ権力への自覚と，SL4：自身が他者に与える影響の不透明性に起因するSNS上の議論への参加の回避が得られた。以下，4.2.1.でSL1とSL2について，4.2.2.でSL3とSL4について示す。

4.2.1. SL1とSL2について

RQ1の（1）喧嘩のように見えるやりとりと（2）日本語教育業界に対するネガティブな意見に関連する寺山さんの経験を説明するストーリーラインとして，SL1：将来の夢が見つからないというコンプレックスからの解放と，SL2：周囲からの否定的な意見や学習での苦勞を乗り越えたという自負という2つが得られた。これらは，日本語教師になった後どのような経験をしたのかだけでなく，寺山さんにとって日本語教師という職がどのような意味を持つのかについて影響を与えた過去の経験である。

まず，SL1：将来の夢が見つからないというコンプレックスからの解放である。これは主に，寺山さんが「将来の仕事」を気にするようになった小中学校時代の語りが中心となっている。寺山さんは日本語教師を目指すようになる前，「私あんまり将来の夢があんまりというか，将来の夢がなかったので，小中と，それ結構コンプレックスに思っていて，みんな結構何々になりたいとか，そういう目標とかがある中で私はなくて，ずっと考えてたっていうこともあって」（②T6）のように，将来の夢（したい仕事，なりたい職業）が見つからないというコンプレックスを抱えていた。その後，日本語教師という職を目指すことに決めた時のことについて，寺山さんは「やっと本当に高校2年生の時に，やっと，やっとこれで生きていけるなみたいな感じでした，あの，将来に向かってそれをイメージしてやっていけるなっていう感じだったので，私としては結構もう，あ，良かった，やっとやっとなんていう感じの気持ちでしたね」（②T8）と述べていた。

このように、寺山さんにとって日本語教師という職業は、「将来やってみたい仕事」以上の意味があった。以下、SL1を示す。

SL1：将来の夢が見つからないというコンプレックスからの解放

寺山さんは母親の影響で幼少期から継続的に留学生と関わる機会があり、外国の人たちと仕事をしたいという漠然とした夢を持っていた。しかし、仕事に対する知識や経験の少なさから、具体的な仕事のイメージが湧かなかった。小・中学校時代、将来したい仕事が決まっている多くの同級生を見て、将来したい仕事が決まっていない自分に対してコンプレックスを感じ、私は将来何の仕事をしたのかという継続的な悩みを抱えていた。特に、学生時代の将来の夢・将来したい仕事に関わる授業は、当時素を出せていた自分が唯一嘘をつかなければいけない時間であり、苦痛を伴う辛い時間であった。高校生の時、将来したい仕事について考える授業があった。外国の人たちと仕事をしたいという漠然とした夢があった寺山さんだが、仕事に対する知識や経験の少なさから、英語ができなければいけないというイメージがあり、英語に対する若干の苦手意識があった寺山さんには、外国の人と英語で関わる仕事は私は本当にしたいのかという疑問が残るものであった。それでも外国の方と仕事をしたいという漠然とした夢は残っており、情報を探した結果、外国の人と英語を使わなくても関わるができる仕事として見つかったのが日本語教師であった。調べてみると、「しっくりくる」という感覚があり、多少大変でも頑張りたい仕事だと感じた。収入の少なさや資格の不透明さなどちゃんとした仕事ではないというイメージも持ったが、実際に仕事としている人もいるという事実から、自分も同じ立場になればいいという前向きな思考をもった。

このように、寺山さんにとって日本語教師は、将来したい仕事が決まっていない自分というコンプレックスと向き合ったずっと苦しい9年間を経て、ようやく見つかった将来したい仕事であり、自身を将来したい仕事がある自分へと変化させ、長年抱えていたコンプレックスからの解放をもたらしたものだ。

次に、SL2: 周囲からの否定的な意見や学習での苦労を乗り越えたという自負である。これは、日本語教師を目指すようになった後、そして日本語教師になった直後の経験が基になっている。まず、否定的な意見とは、高校時代には「それは職業じゃないから」(②T141)、大学時代には「今までもこれを終わってからその職業にそのままついてるっていう人は少ないよ」(②T157)、そして日本語教師として働き始めた東南アジアの国の機関で「寺山先生はもう帰ったらやめちゃうよ、3年もつかな」(③T48)のように、高校時代から繰り返し言われてきたと述べていた。また、学習での苦労とは、「(日本語教育は)副専攻だったんですけど、副専攻でやってる人の中でも数人しかもう続けてる人もいないしとか、なんかそういう感じで、しかも私全然勉強もできないんで、できなかったんです、成績良い方じゃない、高校の時とかもすごい成績悪い方だったので、頑張った、頑張ったっていうのも思ってるんです、多分自分が」(①T128)のように、特に高校時代から大学時代にかけて学習面で苦労したという経験のことを挙げていた。寺山さんは、

このような過去を乗り越えて今の立場があるという自負を持っていた。以下、SL2を示す。

SL2：周囲からの否定的な意見や学習での苦勞を乗り越えたという自負

寺山さんは高校時代、担任教師から仕事としての日本語教師を目指すことに対する否定的な意見を言われることが度々あった。しかし、実際に仕事としている人もいるという事実から自分も同じ立場になればいいという前向きな思考をもった。ただ、当時の自身は勉強をしている風だけの時間が多く場当たりのこなす勉強であったと感じており、1度浪人を経験している。このことから、寺山さんは大学時代、「大学＝就職前のモラトリアム期間」というイメージとは異なり、真面目な授業態度でスケジュール調整が大変なほどの多くの授業の履修をした。このことについて、寺山さんは「私がんばった」という自信を持っている。また、大学時代、韓国人留学生のチューターを担当した際、多くの留学生との友達としての交流や、留学生からの日本語に関する素朴な疑問を解決できる喜びから、「大学に来る留学生」に日本語を教えたいという想いを抱くようになった。しかし、教員から、過去の修了生の現状から仕事としての日本語教師を目指すことに対する否定的な意見を聞いた。また、大学の同級生からも、仕事としての日本語教師を目指すことに対する否定的な意見を聞いた。その際、高校時代と同様、実際に仕事としている人もいるという事実から、自分も同じ立場になれば良いという前向きな思考を持ち、日本語教師を目指すことにした。

大学卒業後、寺山さんは東南アジアのある国の日本語教育機関で働き始めた。当時寺山さんは、授業外での授業のシミュレーションや学生との関係性づくりは100%以上頑張っているという自信、同期の教師の中で一番頑張っているという自信を持っていた。そのような準備の時間も含め、日本語教育に関わる時間は楽しさとやりがいのある時間であり、日本語教師は天職であるという実感を得て、仕事として日本語教師を続けたいという気持ちを持っていた。しかしある時、上司に仕事としての日本語教師を続けることに対する否定的な意見を言われた。それは寺山さんにとって今でも忘れられないほどショックな経験となっている。

このように、仕事としての日本語教師を目指すことに対する否定的な意見や仕事としての日本語教師を続けることに対する否定的な意見を受けたこと、また、大学時代のスケジュール調整が大変なほどの多くの授業の履修を経て今の立場にいることについて、寺山さんは過去を頑張って乗り越えて夢を叶えたという自負を持っている。

4.2.2. SL3とSL4について

RQ1の(3)日本語教育を変えていこうとする高い志を説明するストーリーラインとして、SL3：権力に対する反抗心と自身が持つ権力への自覚と、SL4：自身が他者に与える影響の不透明性に起因するSNS上の議論への参加の回避という2つが得られた。なお、権力に関する内容は、寺山さんはRQ1のインタビューでは語っていない。RQ2の1回目のインタビューの途中で筆者が発言の内容を確認して「このような理解で良いですか」と尋ねた際、寺山さんが「そうですね、そんな感じがします、あとは権力に対するすごく、あの反発があるっていうのはあるかもしれない、やっぱりそれは大学の時の授業とか先生とか」(②T189)と答えた時に初めて現れた。

まず、SL3：権力に対する反抗心と自身が持つ権力への自覚である。これは、上述の②T189の後の部分で述べられていた権力に対する反抗心を持ち始めた部分と関連する。寺山さんは大学時代から上述の②T189の語りのように大学時代から権力に興味を持ち始め、「権力がどれほどすごいものかっていうのを勉強してきて、やっぱ先生にもらった言葉で、『世界を変えていくのは少数派だから』⁸⁾ っていうのはずっと思ってた」(②T191)と語った。そして、「権力を持ってない少数派で、私そっちに属していたいっていうのも多分どこかで思ってるんだと思うんですけど」(②T193)と考えている。このように権力は持ちたくない(権力を持つ集団には属したくない)と考える一方で、留学生別科の専任教員であるという立場が周囲(学生、非常勤教員)に対して与える影響(=権力性)も感じており、「私は全然そうしたくないと思っててもそうなくなってしまっていることはよくあるかな」(③T113)と述べていた。以下、SL3を示す。

SL3：権力に対する反抗心と自身が持つ権力への自覚

寺山さんは大学時代、歴史や文化を中心に学ぶ学科に所属していた。その中で、集団を束ねる権力者(たち)の暴走により集団内の一人ひとりの意志が尊重されない状態となり多くの犠牲を伴う他の集団との衝突が起きたことを人類の歴史で何度も見られる史実として学んでいた。また、権力を持たない立場の人たちの起こした運動の影響の大きさを学んだ。このことから、権力を持つことで見えなくなる世界や聞こえなくなる声があると考えており、権力を持つ集団に属することに対する反抗心を持っている。例えば、寺山さんは自身について「日本語を教えている人」であると言い、教師という語の使用の意図的な回避をしている。これは、「教師」は何らかの組織に所属していることを表す呼称であり、自身が何らかの権力性を帯びていることを表す呼称であると考えているからである。また、現在の職場においても、集団の中で権力を持つ人の指示や提案に対して違和感があっても従ってしまう状況は時々経験するが、従うだけでなく自分なりの考えを持つことが重要であると考えている。

一方で、寺山さんは権力を持ち始めているという自覚がある。ある時、学習者が寺山さんについて他の教師と異なる権力性を持った立場であると気づき自身に対する学習者の接し方の変化が起きたと感じた。このことから、寺山さんは、自身が持つ権力性・権威性についての自己と他者の認識のズレが生じ得ると考えている。

最後に、SL4：自身が他者に与える影響の不透明性に起因するSNS上の議論への参加の回避である。これは、権力に対する考えがSNSの利用にも影響していることを述べている部分である。SL3で述べたように、寺山さんは、専任教員という自身の立場が持つ権力性については意識していた。しかし、「これ(=自分のことばが自分の想定以上に他人に影響を与えること)は仕事だけではなくて普通にプライベートでもあるんですけど、そんなつもりで言っていないとか、何も覚えてないとか」(③T154)のように、専任教員という立場以外でも自身の発言が思わぬ形で他者を変えてしまうことがあることを経験していた。このことから、「なんかちょっと自意識過剰かなとも今は思いましたけど」(③T158)と思いつつも、SNS上で日本語教育に関する議

論に参加する（＝自分の意見を書く）と、想定以上に広範囲の他者に影響を与えるのではないかと考えていた。また、現在の立場や仕事にもある程度の満足感もあり、そのような議論への参加を避けるようにしていた。その一方で、日本語教育に関する議論は日本語教師である以上避けては通れない議論であるとも考えており、そのような議論を見つても参加しないことに対して「ちょっと良くないかもしれない」（②T165）と考えていた。以下、SL4を示す。

SL4：自身が他者に与える影響の不透明性に起因する SNS 上の議論への参加の回避

寺山さんは、Twitter 上で日本語教育全体の改善や変化の必要性を主張する人たちの議論を見て、素直にすごいなという気持ちを抱いていた。特に、集団に所属し主張を形や行動にしていこうとしている人たちは日本語教育の中心を担っていく人たちであると感じていた。一方、寺山さんは、Twitter 以外の場で自分にとっては何気なく言ったことばが他者にとってはプラスの影響であったと言われた経験があった。この経験から、自分にとっては何気なく言ったことばが他者にとってはプラスの影響にも他者にとってはプラスではない影響にもなる可能性があり、自分のことばが多様な他者に与え得る影響の考慮の必要性を感じていた。その上で、政治など自分の声に関係者に直接届かない領域については議論への積極的な参加や意見の提出をしたいと考えていた。一方、日本語教師は自分の声に関係者に直接届き得る領域であると考えていた。Twitter 上で見られる議論も自分自身にも関わっている問題であるという認識はあるが、関係性が構築されていない多数の他者にも自分の声が拡散する可能性があるため、それが他者にとってはプラスではない影響となった場合、関係者や当事者が私との関わりを避けるのではないかと不安を感じていた。現在、自身の現状に対するある程度の満足感もあり、日本語教師も目立たず細々と続けていきたい仕事として考えている。そのため、Twitter 上での議論については関わりや参加の回避をしており、自分のことなのに自分のことじゃないものと感じていた。そのような自身について、現在中途半端な立ち位置にいると感じており、このままではよくないのかもしれないという迷いを抱えている。

5. 全体の考察

5.1. RQ1とRQ2の結果のまとめ

本研究では、寺山さんが Twitter の使用を中止した要因を明らかにすることを目的に、段階を踏んで調査と分析を行った。以下、2つの RQ について簡潔にまとめる。

まず、RQ1の「寺山さんが日本語教育用の Twitter の使用をやめた要因は何か」では、寺山さんは Twitter 上で (1) 喧嘩のように見えるやりとり、(2) 日本語教育業界に対するネガティブな意見、(3) 日本語教育を変えていこうとする高い志の3点に関するやりとりを見たことを挙げた。ソーシャルメディアの使用の中止に焦点を当てた先行研究では、ソーシャルメディアの使用による情報やコミュニケーションの過負荷、そしてソーシャルメディアの機能面（セキュリティ、複雑性など）が主な要因として挙げられてきた。一方、ソーシャルメディア内の具体的な書き込み

の内容は調査の対象とされてこなかった。これは、先行研究の多くが量的な調査によるものであったためと思われる。本研究で対象とした寺山さんの場合、Twitterの使用を中止した要因として、先行研究の結果のような項目ではなく、ソーシャルメディア（Twitter）内の書き込みの内容を挙げていた。

また、3.3.で示したように、RQ1で明らかとなった3つの要素には、SNS以外の寺山さんの過去の経験が影響していることが仮説として立てられた。そこで、RQ2「RQ1について、寺山さんのそれまでの経験（日本語教育関係、日本語教育関係以外）はどのように関連しているのか」を設定し、調査と分析を行った。その結果、RQ1の（1）喧嘩のように見えるやりとり、（2）日本語教育業界に対するネガティブな意見に関連する過去の経験として、SL1：将来の夢が見つからないというコンプレックスからの解放、SL2：周囲からの否定的な意見や学習での苦勞を乗り越えたという自負が得られた。一方、RQ1の（3）日本語教育を変えていこうとする高い志に関連する過去の経験として、SL3：権力に対する反抗心と自身が持つ権力への自覚、SL4：自身が他者に与える影響の不透明性に起因するSNS上の議論への参加の回避が得られた。

5.2. 考察

本節では、本研究全体の考察として、RQ1とRQ2の結果の関連から、寺山さんのTwitterの使用の中止の要因の説明を試みる。

まず、RQ1の（1）喧嘩のように見えるやりとり、（2）日本語教育業界に対するネガティブな意見と、RQ2のSL1：将来の夢が見つからないというコンプレックスからの解放、SL2：周囲からの否定的な意見や学習での苦勞を乗り越えたという自負の関連についてである。寺山さんは、小中学校時代に周囲の同級生に比べて将来目指す職業がなく苦しく感じていたという経験から、日本語教師をただの職業としてではなく、将来の夢が見つからないというコンプレックスからの解放をもたらしてくれたものであると捉えていた。また、目指すようになった期間や実際になった後の期間の経験から、周囲からの否定的な意見や学習での苦勞を乗り越えたという自負を持っていた。このことから、寺山さんにとって日本語教師はただの職以上の意味を持つものであったと考えられる。そのような中で、同業者による（1）喧嘩のように見えるやりとりや（2）日本語教育業界に対するネガティブな意見を見ることは、寺山さんにとって苦痛となっていた。以上のことから、寺山さんがTwitterの使用を中止した理由の1つは、寺山さんにとっては単なる「仕事」以上の意味と価値を持つ日本語教師という職業について、同業者からのネガティブな発言を見たくないと感じたからであると考えられる。

次に、RQ1の（3）日本語教育を変えていこうとする高い志と、RQ2のSL3：権力に対する反抗心と自身が持つ権力への自覚、SL4：自身が他者に与える影響の不透明性に起因するSNS上の議論への参加の回避の関連についてである。寺山さんは大学時代に出会った教員の影響で、それまで意識することがなかった「権力」について考えるようになり、自身は権力を持つ側には属したくないと考えた。しかし、無意識の権力性や自身の言動による他者への影響は、専任教員という立場にいる時でもそれ以外でも容易に起こるということを経験していた。このことから、SNS

上で日本語教育に関する議論（＝日本語教育に対する高い志が反映されたもの）を見て何か意見を持ったとしても、「なんかちょっと自意識過剰かなとも今は思いましたけど」（③ T158）と思いつつも参加することを避けていた。その一方で、そのような議論は日本語教師を続ける以上は避けられないものであるとも考えていた。そのため、Twitterで高い志を見るたびにその矛盾を感じることに繋がり、「中途半端な立ち位置にいると感じており、このままではよくないのかもしれないという迷いを抱えている」（SL4）のように、ある種の葛藤や自責の念を抱えていた。以上のことから、寺山さんがTwitterの使用を中止した理由のもう1つの内容として、寺山さんは権力を持つことをできるだけ避けたいと考えており、高い志に関する議論も権力に関わると考えているため参加は避けたいが、同時に日本語教師である以上避けられないものでもあるため、そのような自身の矛盾を感じる環境を避けたいと感じたからであると考えられる。以上2点をまとめると、図2のようになる。

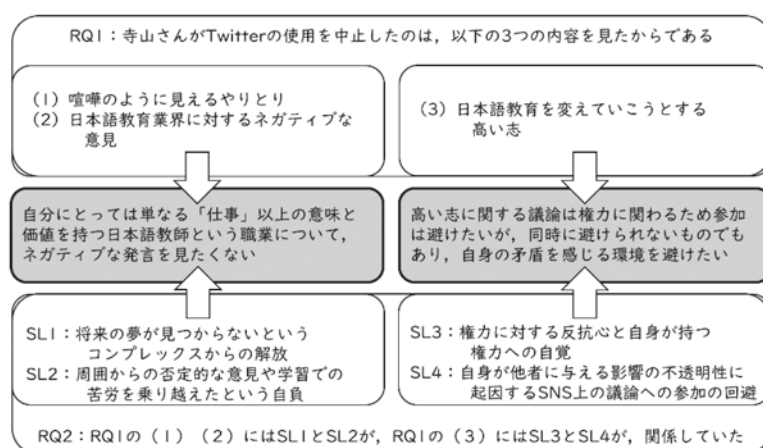


図2. 寺山さんがTwitterの使用を中止した2つの理由（中段塗りつぶし）

このように見てみると、寺山さんがTwitterの使用を中止した背景には、2.2.で示した渡辺(2018)やサビカス(2023)のライフテーマが関わっていることが分かる。寺山さんにとって、日本語教師を目指すことがどのような意味があったのか（図2下段左側）、また、権力についてどのように考えているのか（図2下段右側）は、個人のキャリアストーリー（個人が直面した発達課題や職業上のトランジション【転機】などが語られたもの）にとって非常に重要な意味を持っていた。つまり、これら2点は寺山さんにとってのライフテーマであったと考えられる。一方、Twitterで見られる内容の中には、寺山さんにとってはライフテーマと合わないと感じる内容が見られた。つまり、寺山さんがRQ1で挙げた3点である（図2上段）。このように、寺山さんがTwitterの使用を中止したのは、自身のライフテーマとTwitter内で見られる日本語教育に関する話題との間で生まれる不一致や葛藤が関わっていたことが明らかとなった（図2中段）。

本研究のような質的研究は、仮説の検証ではなく仮説を生成することを目指すものであるとさ

れている（西條，2007）。本研究では，寺山さんを対象にした調査の結果と考察から，「日本語教師のソーシャルメディアの使用の中止には，それ以前の経験やそこで生まれた価値観（ライフテーマ）などが影響している」という仮説を示した。2.2.で述べたように，個人のソーシャルメディアの使用や中止には，それ以前の経験やそこで生まれた価値観などが影響している可能性が部分的には示されていたが，具体的な事例やデータでは示されていなかった。本研究は，今後の日本語教師のSNSの使用に関する研究について考えられる仮説を具体的な事例に基づき示したものである。

6. 本研究の限界と今後の展望

本研究では，日本語教師の寺山さんを対象に調査を行い，寺山さんがTwitterの使用を中止した要因として挙げていたTwitter上の内容には，寺山さんにとってのライフテーマが関連していたことを明らかにした。そして，「日本語教師のソーシャルメディアの使用や中止には，それ以前の経験やそこで生まれた価値観（ライフテーマ）などが影響している」という仮説を示した。しかし，本研究は寺山さん1名を対象としたケーススタディーであるため，上記の仮説の妥当性の検証が必要である。

今後は，寺山さんのようにSNSの使用を中止した他の日本語教師に対する調査が必要である。例えば，SNS上での日本語教育関係者のつながりは，Twitterだけではなく，Facebook，LINEのオープンチャットなどでも見られる。このような様々なSNSを対象とした調査も必要である。また，2.1.で示した先行研究のように量的な調査も必要であるだろう。最後に，本研究は「使用の中止」のみに焦点を当てたものであるが，SNSの使用の他の側面（使用の開始，使用している時の書き込みの内容など）にも焦点を当てることで，日本語教師のSNSの使用に関わる要因についてより詳細に明らかにできると考えられる。

謝辞

本稿は，韓国日本語教育学会 第66回国際学術発表大会と言語文化教育研究学会 第10回年次大会での発表を基に修正・加筆したものである。寺山さんには，本研究に関わる複数回のインタビューから本稿の内容の確認に至るまで何度となくご協力いただいた。この場をお借りして，厚く御礼申し上げる。

注

- 1) 「Twitter」(ツイッター)は旧名称であり，2023年7月以降は「X」(エックス)という名称となっている。しかし，本研究の調査時点(2023年2月)ではTwitterという名称であったため，本稿では「Twitter」という表記を用いる。
- 2) 南浦・瀬尾・田嶋（2012/2022）は，このような議論やつながりの場はそれぞれの教育機関の中でも設けら

れるべきであると指摘している。

- 3) Twitterは個人で複数のアカウントを作成することが可能である。これは、X（エックス）と名称が変わってからも同様の仕様である（2024年9月7日時点、筆者による確認）。
- 4) 詳細は文部科学省のホームページを参照。https://www.mext.go.jp/mext_01301.html（2024年9月21日閲覧）
- 5) 以降、寺山さん個人に関わる情報の記述は寺山さんに確認を依頼し、記載の許可を得ている。
- 6) 丸数字はインタビューの回数、Tは寺山さん、26は発話番号である。つまり、「①T26」は、「寺山さんとの1回目のインタビューで26番目に出てきた発話」を表す。以降の同様の部分も同様である。
- 7) 大谷（2019）は、ストーリーとストーリーラインの違いについて、「王様が死にました。その後、お后様が死にました」はストーリーであるのに対して、「王様が死にました。そして悲しみのあまり、お后様が死にました」がストーリーラインであると述べている。本研究においても、ある出来事と出来事の間になどの関係があるのかをできる限り明らかに示すことを目指した。
- 8) 寺山さんは、水俣病研究者の故原田正純氏のことばとして学んだと述べていた。

参考文献

- 青木裕美（2023）「自己研鑽ツールとしてのSNSのススメ」瀬尾匡輝・瀬尾悠希子（編）（2023）『ケースで考える！誰も教えてくれない日本語教育の現場』（pp.248-249）、ココ出版。
- 秋田喜代美（1996）「教える経験に伴う授業イメージの変容—比喻生成課題による検討」『教育心理学研究』44(2)、176-186。
- 牛窪隆太（2015a）「日本語教育における『教師の成長』の批判的再検討—自己成長論から逸脱の場としての『同僚性』構築へ」『言語文化教育研究』13、13-26。
- 牛窪隆太（2015b）「教師の役割と専門性を考える」神吉宇一（編）『日本語教育学のデザイナー—その地と図を描く』（pp.145-169）、凡人社。
- 大谷尚（2008）「質的研究とは何か—教育テクノロジー研究のいっそうの拡張をめざして」『教育システム情報学会誌』25(3)、340-354。
- 大谷尚（2019）『質的研究の考え方—研究方法論からSCATによる分析まで』名古屋大学出版会。
- 大向一輝（2006）「SNSの現在と展望—コミュニケーションツールから情報流通の基盤へ」『情報処理』47(9)、993-1000。
- 西條剛央（2007）『ライブ講義 質的研究とはなにか SCQRM ベーシック編—研究の着想からデータ収集、分析、モデル構築まで』新曜社。
- 佐藤郁哉（2008）『質的データ分析法—原理・方法・実践』新曜社。
- サビカス、L. M.（2023）『サビカス キャリア構成理論—四つの〈物語〉で学ぶキャリアの形成と発達』（水野修次郎、長谷川能扶子訳；初版）福村出版。（原典2019）
- 末松大貴（2020）「『新しい日本語学習者』の学習支援者は『学習コミュニティ』『学習支援者』をどのように捉えているのか—Facebook グループ『The 日本語 Learning Community』の教師チームに対する調査結果から」『言語文化教育研究』18、161-181。
- 末松大貴（2021）「SNS上の学習コミュニティにおける学習支援者の『協働』に対する認識—Facebook グループ『The 日本語 Learning Community』での調査結果より」『日本語教育方法研究会誌』28(1)、98-99。
- 総務省（2018年7月）『平成30年版情報通信白書ICT白書』<https://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/whitepaper/ja/h30/pdf/index.html>（2024年9月21日閲覧）

- 総務省（2024年6月21日）『令和5年度 情報通信メディアの利用時間と情報行動に関する調査』https://www.soumu.go.jp/iicp/research/results/media_usage-time.html（2024年9月21日閲覧）
- 高舘七海・田中奈緒子（2024）「インターネット上での行動内容が社会性に及ぼす影響—Twitter 上での行動に注目して」『昭和女子大学生活心理研究所紀要』26, 49-60.
- 高橋敦（2014）「グローバルネットワーク時代における『新しい日本語学習者』とオンラインコミュニティへの需要」『桜美林言語教育論叢』10, 139-156.
- 高橋敦（2015）「社会的視点から見た第二言語習得におけるオンラインコミュニティの可能性と管理者の役割—Facebookを用いた実践から」『言語教育研究』5, 41-58.
- 藤川大祐（2012）「社会とつながる教員養成がなぜ求められるのか—情報革命以降の教師を育てるために」『千葉大学人文社会科学部研究プロジェクト報告書』249, 1-6.
- 南浦涼介（2021）「自主的研究組織と社会科教師の多様性—あるいはSNSという対抗的公共圏からの学会へのまなざし」『社会科教育論叢』51, 63-72.
- 南浦涼介・瀬尾匡輝・田嶋美紗子（2022）「訳者座談会 4 クマラヴァディヴェルとポストメソッド」クマラヴァディヴェル, B.『言語教師教育論—境界なき時代の「知る・分析する・認識する・為す・見る」教師』(pp.271-279) 春風社. (原典2012)
- 四方田健二・滝浪常雄・藤井真吾（2022）『「#教師のバトン」プロジェクト投稿内容の分析—Twitter投稿の量的・質的内容分析』『教師学研究』25(1), 21-30.
- 脇坂真彩子（2021）「ケーススタディー」八木真奈美, 中山亜紀子, 中井好男（編）『質的言語教育研究を考えよう—リフレクシブに他者と自己を理解するために』(pp.157-183) ひつじ書房.
- 渡辺三枝子（編）(2018)『新版 キャリアの心理学【第2版】—キャリア支援への発達のアプローチ』ナカニシヤ出版.
- Ahmed, R. R., Qureshi, J. A., Arshad, F., Channar, Z. A., Parmar, V., & Salleh, N. Z. M. (2022). The social media break-up: Psycho-behavioral measures and implications. *IEEE Access*, 10, 58116-58135.
- Cetinkaya, L. (2019). The usage of social network services in school management and their effects. *World Journal on Educational Technology: Current Issues*, 11(1), 116-127.
- Lin, J., Lin, S., Turel, O., & Xu, F. (2020). The buffering effect of flow experience on the relationship between overload and social media users' discontinuance intentions. *Telematics and Informatics*, 49, 101374.
- Mason, S. (2019). Teachers, Twitter and tackling overwork in Japan. *Issues in Educational Research*, 29(3), 881-898. h
- Park, K. (2015). A Study on the Avoidance Intention of Social Network Service in Post Adoption Context: Focusing on the Facebook User. *The Journal of Information Systems*, 24(1), 147-168.
- Van Den Beemt, A., Thurlings, M., & Willems, M. (2019). Towards an understanding of social media use in the classroom: a literature review. *Technology, Pedagogy and Education*, 29(1), 35-55.